

ダニエル書 - 第百八十五番

神性の体現：ペテロの深遠な告白とその含意

Jeff Pippenger

2024-04-15

キリストの「弟子たちはキリストを誰だと言っているのか」という問いに対してペテロが答えを示したとき、彼はイエスが油注がれた者、キリスト、メシアであると述べた。彼はまた、イエスは神の子であるとも言った。

イエスがカイサリア・フィリポの地方に来られたとき、弟子たちに尋ねて言われた、「人々は、人の子であるわたしを誰だと言っているか。」彼らは言った、「ある人たちは、あなたはバプテスマのヨハネだと言い、ほかの人はエリヤ、さらにほかの人はエレミヤ、あるいは預言者の一人だと言っています。」

イエスは彼らに言われた、「では、あなたがたはわたしを誰だと言うのか。」

シモン・ペテロが答えて言った、「あなたはキリスト、生ける神の御子です。」するとイエスは彼に答えて言われた、「あなたは幸いだ、バルヨナ・シモンよ。あなたにこれを明らかにしたのは血肉ではなく、天におられるわたしの父である。また、わたしもあなたに言う。あなたはペテロであり、この岩の上にわたしの教会を建てよう。よみの門もそれに打ち勝つことはない。わたしはあなたに天の御国の鍵を授ける。あなたが地上で結ぶものは何でも天においても結ばれ、あなたが地上で解くものは何でも天においても解かれる。」 マタイによる福音書 16:13-19

聖霊はペテロを通して、十四万四千人が理解すべき本質的な真理を示した。聖霊はパニウム、すなわちカイサリア・フィリピでそれを示した。パニウムは竜の礼拝における最も神聖な神殿の場所である。なぜなら、ギリシャは世界を象徴しており、終わりの日における世界は国際連合であり、それは竜の地上の代表だからである。「地獄の門」とは、ギリシャの山羊の神パーンの神殿の呼び名である。その神殿は、パニウムの泉をたたえた洞窟の前に建てられた。パニウムの泉はヨルダン川に注ぎ、そのヨルダン川はキリストの象徴である。

「Jordan」という名前は「下る者」を意味する。ヨルダン川はイスラエル北部の山岳地帯にその流れを発し、主な水源はヘルモン山脈の最高峰であるヘルモン山の湧水で、そこには「地獄の門」と呼ばれる泉がある。「Hermon」は「聖なる」を、「Jordon」は「下る」を意味する。ヨルダン川はヘルモン山の高地から流れ出てヨルダン地溝帯を下り、やがて地球の地表で最も低い地点である死海に達する。

ヨルダン川に注ぎ、パンの神殿に源を発し、最終的に地上で最も低い地点に至るその水は、神の子が最も高い聖なる山を離れ、この世の最も低い「死の海」へと下ってこられたことを表している。キリストが天から十字架の死へと下ってこられたことはまた、墮落した人間の肉を身に負われたことをも表している。というのも、天から十字架へと至るその旅路は、「地獄の門」を源とする水に潤されていたからである。

死海は地球上で最も低い場所であるだけでなく、塩分濃度は海水の9倍で、地球上で最も塩分の濃い水域です。死海に象徴される十字架上でのキリストの死は、彼が多くの者との契約を確証したところです。

あなたの穀物の献げ物のすべてに、塩を加えなければならない。あなたの神の契約の塩を、あなたの穀物の献げ物から欠かしてはならない。あなたのすべての献げ物とともに、塩をささげなければならない。レビ記 2:3。

ヘルモン山の泉を水源として流れ出たヨルダン川は、その途上でガリラヤ湖（ティベリウス湖、キネレト湖としても知られる）を通過する。ガリラヤは「蝶番」または「転換点」を意味する。ティベリウスはアウグストゥス・カエサルの後を継いだローマの支配者の名である。また、この湖はその形からキネレトと呼ばれ、これは「ハーブ」または「リラ」を意味する。人類にとっての転換点は、ティベリウス・カエサルが統治していたときにイエスが十字架につけられ、天のすべての豎琴が沈黙したことであった。ギリシアの神パンの神殿である「地獄の門」と結びついたヨルダン川の地理的な証しは、聖霊の靈感によってペテロが宣言した証しを物語っている。

キリストの受肉とは、神の御子をご自身に人間の肉をお取りになったときに起こった神性と人性の結合であり、このように神性と人性が結び合わされたことは、パンの泉からの水がヨルダン川を養うことによって象徴されている。パンの泉に水を供給したのは、ヘルモンの山々に降った露と雨と雪であり、ヘルモンは「聖なる」山、すなわち上なるエルサレムを表している。

都に上る歌。ダビデによる。見よ、兄弟たちが一致して共に住むことの、なんと良く、なんと美しいことか。それは、頭に注がれた尊い香油のようだ。ひげに流れ、アロンのひげにまで、衣の裾にまで流れ落ちる。ヘルモンの露のように、またシオンの山々に降りる露のように。そこに主が祝福を命じられた。すなわち、とこしえのいのちを。詩篇 133:1-3。

アロンのひげに流れ落ちた「尊い香油」は、彼とその息子たちが神の祭司として油注がれたときに用いられた油でした。

あなたは、祭壇の上にある血と注ぎの油を取り、それをアロンとその衣服、彼の子らと、彼と共にいる彼の子らの衣服にふりかけなさい。こうして、彼もその衣服も、彼の子らも、彼と共にいる彼の子らの衣服も、聖別される。出エジプト記 29:21

ペテロは、すべての弟子たちの告白を表明し、そのことによって、旗印として掲げられる一つにされた祭司職として油注がれる十四万四千人の告白も表明した。アロンに注がれた「油」は、ヘルモン山の露でもあり、またシオンの山々の露でもあった。この「油」と「露」は、聖霊の油注ぎを象徴するメッセージである。

天よ、耳を傾けよ、わたしは語る。地よ、わが口の言葉を聞け。わたしの教えは雨のように滴り、わたしの言葉は露のようにしたたり、柔らかな若草に降る細雨のように、草に降りそそぐ驟雨のように。

わたしが主の御名を告げ知らせるゆえに、われらの神に偉大さを帰せよ。申命記 32:1-3。

「露」はシオンの山々に降る「教え」であり、また、終わりの時代の神の祭司である十四万四千を一つにする油注ぎの「油」である。その教えは雨のように降り、露のように滴り落ちる。なぜならそれは「宣べ伝えられる」からである。それが「宣べ伝えられる」のは、真夜中の叫びと大声の叫びのメッセージを告げ知らせる旗印となる統一された祭司職を通して、天と地が耳を傾け、その御口の言葉を聞くべきだからである。

良い知らせをもたらす者、平和を告げ知らせ、幸いを告げ知らせ、救いを告げ知らせ、シオンに向かって「あなたの神は統べ治めておられる！」と言う者の足は、山々の上に何と美しいことか。あなたの見張りたちは声を上げ、共に声を合わせて歌う。主がシオンに帰られるとき、彼らは目と目を合わせて見るからだ。エルサレムの荒れ跡よ、共に歓喜の声を上げ、共に歌え。主はその民を慰め、エルサレムを贖われた。主はすべての国々の目の前で、その聖なる御腕をあらわにされた。地の果てまでも、私たちの神の救いを見るであろう。イザヤ書 52:7-10

終わりの日の見張りたち、ペテロに代表される者たちは、救いと平和を告げ知らせ、彼らは一つにされる。というのは、彼らは目と目を合わせて見るからである。これは“the Lord brings again Zion”のときに起こる。“bring again”と訳されるヘブライ語は「元に戻す」という意味である。主がシオンを元に戻されるとは、散らされることによって表されるように、シオンが捕囚の下にあったということであり、捕囚がやむときにそれが元に戻されるということの意味する。

主はこう言われる。バビロンで七十年が満ちるとき、わたしはあなたがたを顧み、あなたがたに対してわたしの良きことばを成就して、あなたがたをこの場所に帰らせる。わたしは、あなたがたに対して抱いている思いを知っている、と主は言われる。それは平安の思いであって、災いではない。あなたがたに望みのある行く末を与えるためである。そのとき、あなたがたはわたしを呼び求め、行ってわたしに祈る。わたしはあなたがたに耳を傾ける。あなたがたはわたしを求め、心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見いだす。わたしはあなたがたに見いだされる、と主は言われる。わたしはあなたがたの捕らわれの状態を転じ、わたしがあなたがたを追いやったすべての国々とすべての場所からあなたがたを集める、と主は言われる。わたしは、わたしがあなたがたを捕囚として連れ去らせた元の場所へ、再びあなたがたを連れ戻す。エレミヤ書 29:10-14.

すべての預言者は終わりの日々を語っており、終わりの日々には、預言の証しを成就するために、彼の民はやがて解かれる捕囚の状態に置かれている。

主の言葉がエレミヤに臨んだ。「イスラエルの神、主はこう言われる。わたしがあなたに語ったすべての言葉を書物に書き記せ。見よ、その日が来る、と主は言われる。そのとき、わたしはわたしの民イスラエルとユダの捕囚を帰らせる、と主は言われる。わたしが彼らの先祖に与えた地に彼らを帰らせ、彼らはそれを所有する。」エレミヤ書30:1-3

ラザロが四日間眠っていたように、またダニエルが二十一日間嘆き悲しんだように、三日半の眠りの後、ミカエルは彼の終わりの日の民である二人の証人をよみがえらせ、彼らを一つに結び、さらに全世界に発表されるメッセージを通して彼らに油を注ぐ。そのメッセージは、ヘルモン山（聖なる山）の「露」であり、それはパンの泉を潤し、その泉

がやがてヨルダン川を潤す。そのメッセージによってなされる油注ぎは、ペテロが認めた、イエスがキリストとなられた時を画したイエスの油注ぎを表している。

ペテロがキリストを神の子と認めたとき、ヨルダン川に注ぐ「よみの門」の水がそれを象徴しているように、彼はキリストを神の子であると同時に人の子でもある方として示した。ペテロの告白は聖霊の感動によって生み出されたものであり、すなわち、イエスがキリスト、油注がれた方であり、神であり同時に人でもあるという真理であった。そしてイエスは、この真理こそが終わりの日の神の民に対する戦いの焦点となると指摘し、「よみの門」はこの真理に打ち勝つことができないので、その民が勝利すると約束された。

真実は、2001年9月11日に、ちょうどイエスが洗礼で油注がれたように、十四万四千人への封印が始まり、そしてその歴史において、彼が彼らをよみがえらせて彼らの捕囚を転じるまで、終末の民を打ち倒す失望が起こるということである。よみがえりの過程には、彼の民を一つにまとめ、旗印として掲げられる強力な軍勢へとすることが含まれる。街路での死の後の行われる、よみがえらせ、清め、統一し、高く上げるという働きは、ダニエル書11章10～15節および他の聖書箇所において示されている。しかし13～15節において、キリストは再び弟子たちをカイサリア・ピリピ、すなわちパニウムへと連れて行き、そこで神の封印が永遠に刻印される。

これらの事実の深遠さを理解してはじめて、カイサリア・フィリピの証しに見いだされる真理の啓示を認識することができる。マタイ16章18節では、シモン・バルヨナの名がペテロに変えられるが、これは最近の記事で述べたように、十四万四千を象徴している。その節に示されている数学的な啓示は、イエスを「驚くべき数を数える方」として示している。というのも、ペテロが十四万四千を表しているとは理解できるだけでなく、マタイ16:18もまた「 ϕ 」を示す数学的記号となっているからである。

「phi」に関連する数学を論じる前に、次の点に留意すべきである。「phi」は、パニウムという町の二つの名称のうち第二の名である「Philippi」という語の一部である。十八節は、イエスがペテロにヘブライ語で語られたことを示しており、それがギリシア語で記録され、のちに英語へ翻訳された。これら三段階は、キリストがご自身の御言葉を統御しておられることを示している。その語を、番号付けされた位置を乗算するという数学的体系に照らして考察すると、「ペテロ」という名が十四万四千に等しいことが示され、こうして、イエスが「驚くべき数を定める方」であることが強調される。まさに同じその節、すなわちイエスがご自身の教会を建てると宣言される箇所において、「驚くべき数を定める方」は翻訳の過程を統御し、十六章十八節に表されている真理が、数学的記号「phi」を表すようにされた。

また、わたしはあなたに言う。あなたはペテロである。この岩の上に、わたしはわたしの教会を建てる。黄泉の門はこれに打ち勝つことはない。マタイ 16:18

彼の教会は、イエスはキリストであり神の子であるという教義の上に建てられているだけでなく、彼は「ことば」であり、その「ことば」が数学や文法、人のわざを含むあらゆるものを創造し、支配しているという事実の上にも建てられている。

この方であって、私たちはまた、ご自身の御旨のはかりごとに従ってすべてのことを行われる方の御計画によって、あらかじめ定められ、相続を得た。エペソ人への手紙 1:11

ギリシャ文字 ϕ (phi) で表されることの多いPhiは、約1.618033988749895に等しい数学定数である。この数は黄金比、あるいは神の比として知られている。これは「無理数」であり、単純な分数で表すことはできず、小数表示は循環することなく無限に続くことを意味する。

黄金比は多くの注目すべき性質を持ち、数学、美術、建築、自然などさまざまな分野に現れる。長方形、五角形、十二面体といった幾何学的な図形にもよく見られ、そこでは長い辺と短い辺の比が ϕ に等しい。

美術や建築において、黄金比は美しく調和のとれたプロポーショナルを生み出すと考えられている。古代文明からルネサンス、さらにはその後に至るまで、歴史を通じて、構図、建築物、芸術作品の設計において、芸術家や建築家によって用いられてきた。数学においては、黄金比はフィボナッチ数列を含むさまざまな数式や数列に現れる。フィボナッチ数列では、各項は直前の二つの項の和である。フィボナッチ数列の項が大きくなるにつれて、連続する項の比は ϕ に近づく。

16章18節において、私たちは数学のファイ (1.618...) を見いだす。「ご自身の御旨のはかりごとに従ってすべての事を働かせる」神であるイエスは、終わりの日に地獄の門に対してご自身の教会が戦う戦場を特定する預言的な地理の中に、ご自身がパルモニ、すなわち「驚くべき数」あるいは「秘密を数える者」であることを示す印を置くことを定められた。その預言的な戦場において、数を支配することによって、彼は「鳩のメッセージを聞く者」である「シモン」から改名され「ペテロ」となった者、すなわち「ペテロ」をもって十四万四千を表し、こうして十四万四千を御自身の終わりの日の契約の民として印づけた。

彼がご自身の教会を建てるためにお選びになった「岩」は、礎の岩、すなわちレビ記二十六章の「七たび」の土台であり、隅のかしら石である。というのも、キリスト以外に真の土台はないからである。キリストの洗礼のとき、シモンが鳩のメッセージを「聞いた」。その時から、死海の十字架に至るまで、千二百六十日のあいだ、一日に二度、朝と夕のいけにえがささげられていた。ただし、その千二百六十日の最後の日だけは、その日、夕のいけにえは祭司の手から逃れ、十字架の上でキリストは第二千五百二十番目のいけにえとして死なれた。

すべては恐怖と混乱に陥っている。祭司はいけにえを屠ろうとしている。しかし、力の抜けた手から刃が落ち、子羊は逃れる。型と反型は、神の御子の死のうちに会った。大いなるいけにえはささげられた。至聖所への道が開かれた。すべての人のために、新しく生ける道が備えられた。罪深く悲しみに沈む人類は、もはや大祭司の来臨を待ち望む必要はない。『各時代の希望』 757頁。

彼がご自分の教会をその上に建てようとしている「岩」は、建築者たちが捨てた礎石であり、その数は「二千五百二十」である。短い一つの節で、キリストはご自身を万物の主

として示しており、そのとき彼はダニエル書十一章十三節から十五節において立って語っている。

また、わたしはあなたに言う。あなたはペテロである。この岩の上に、わたしはわたしの教会を建てる。黄泉の門はこれに打ち勝つことはない。マタイ 16:18

次回の記事でこの研究を続けます。

「秘められた事柄は私たちの神である主のものだが、明らかにされた事柄は、永遠に私たちと私たちの子どもものだ。」申命記29章29節。神が創造のわざをどのように成し遂げられたのか、神は人間に決して明らかにされていない。人間の科学は、いと高き方の秘密を探り出すことはできない。神の創造の力は、その存在と同じように理解を超えている。

神は、科学と芸術の双方において、世に洪水のような光が注がれることをお許しになった。しかし、自らを科学的だと称する人々が、これらの主題をただ人間的な観点からのみ論じるとき、彼らは必ずや誤った結論に至る。私たちの理論が聖書に見出される事実と矛盾しないのであれば、神の言葉の啓示を超えて思弁することも無害かもしれない。だが、神の言葉から離れ、創造のみわざを科学的原理によって説明しようとする者は、海図も羅針盤もなく未知の大海に漂うことになる。最も優れた知性であっても、その研究において神の言葉に導かれなければ、科学と啓示の関係をたどろうとする試みにおいて途方に暮れてしまう。創造主とそのみわざが彼らの理解をはるかに超え、自然法則では説明しきれないがゆえに、彼らは聖書の歴史を信頼できないものとみなす。旧約と新約の記録の信頼性を疑う者は、さらに一步進んで神の存在をも疑うようになり、そして錨を失って、不信の岩礁に打ち付けられながら漂うことになる。

これらの人々は、信仰の単純さを失ってしまっている。神の聖なる御言葉の神的權威については、揺るぎない確信があるべきである。聖書は、人間の科学的観念によって試されるべきではない。人間の知識は信頼できる導きではない。あら探しをするために聖書を読む懐疑者は、科学か啓示のいずれか、あるいは両方の理解が不十分であるがゆえに、それらの間に矛盾を見いだしたと主張することがある。しかし、正しく理解されるなら、両者は完全に調和している。モーセは神の御霊の導きのもとに書き記したのであり、正しい地質学の理論が、彼の記述と調和しえない発見を主張することは決してない。自然におけるものであれ啓示におけるものであれ、すべての真理は、そのあらゆる現れにおいて一貫している。

神の言葉には、最も博学な学者でさえ決して答えられない多くの疑問が投げかけられている。これらの主題に注意が向けられるのは、日常生活のありふれた事柄の中にさえ、有限な人間の知性はその誇る知恵のすべてをもってしても決して完全には理解できないものがどれほど多いかを示すためである。

それでも科学者たちは、神の知恵、すなわち神がなしたことやなしうることを理解できている。神はご自身の法則に制限されているという考えが広くまかり通っている。人々は神の存在を否定したり無視したりし、人間の心における御霊の働きに至るまで何事も説明できると考え、もはやその御名をあがめも、その力を畏れもしない。彼らは超自然を信じない。神の法則、そしてそれらを通して御心を成し遂げる神の

無限の力を理解していないからである。一般に用いられる「自然法則」という語は、物質界を支配する法則について人間が発見しえた事柄を指すにすぎない。しかし、人間の知識がなんと限られていることか。そして創造主がご自身の法則と調和して働きつつも、有限な存在にはまったく理解できないかたちで働くことのできる領域が、なんと広大であることか。

多くの人々は、物質が生命力を備えている、すなわち物質に一定の特性が与えられ、その後はそれ自身の内在する力によって働くに任されている、と教える。また、自然の働きは定められた法則に調和して営まれ、神ご自身でさえその法則に干渉することはできないのだとも教える。これは誤った科学であり、神の言葉によって支持されてはいない。自然はその創造主に仕えるしもべである。神はご自身の法則を無効にしたりそれに反して働いたりしなさないが、絶えずそれらを御自分の手段として用いておられる。自然は、その法則の中で、またその法則を通して働く知性、臨在、活動する力の存在を証ししている。自然のうちには、父と子の絶え間ない働きがある。キリストは言われる、「わたしの父は今に至るまで働いておられ、わたしも働いている。」ヨハネ5:17

レビ人は、ネヘミヤ記に記された彼らの賛歌の中で、こう歌った。「あなたこそ、ただあなただけが主です。あなたは天、天の天とその全軍、地とその中にあるすべてのものを造られ、…そしてあなたはそれらすべてを保っておられます。」ネヘミヤ記 9:6. この世界に関する限り、神の創造のわざは完成している。というのは、「御業は、世界の基が据えられたときから、すでに終わっている」からである。ヘブル人への手紙 4:3. だが、神の力はなおも、その被造物を支え保つために働いている。いったん動き出した機構が本来の力で自ずと働き続けるから脈が打ち、息が続くのではない。むしろ、私たちが「その方のうちにあって生き、動き、存在している」お方の、あまねく及ぶ御配慮の証しが、ひと呼吸ごと、心臓の鼓動の一つひとつにあるのである。使徒行伝 17:28. 年ごとに地がその恵みを生み、太陽の周りの運行を続けるのも、内在する力のためではない。神の御手が諸惑星を導き、天を秩序正しく行進するその位置に保っておられる。主は「その軍勢を数えて呼び出し、その大いなる力によって皆を名で呼ばれる。御力は強く、一つとして欠けることがない。」イザヤ書 40:26. 草木が繁り、葉が現れ、花が咲くのも、その御力による。神は「山々に草を生えさせ」（詩篇 147:8）、その方によって谷は実り豊かにされる。「森のすべての獣は…神に食物を求め」、最も小さな昆虫から人間に至るまで、あらゆる生き物は日々、その摂理的な御配慮に依存している。詩人の美しい言葉によれば、「これらはみな、あなたを待ち望み……あなたが与えられるものを彼らは集める。あなたが御手を開かれると、彼らは良きもので満たされる。」詩篇 104:20、21、27、28. 神の御言葉は万象を治め、神は天を雲で覆い、地のために雨を備えられる。「神は羊毛のように雪を与え、灰のように霜を散らされる。」詩篇 147:16. 「神がその御声を発せられると、天には多くの水があり、地の果てから蒸気を立ち上らせ、雨とともに稲妻を造り、その倉から風を出される。」エレミヤ書 10:13.

「神は万物の根底である。すべての真の科学はその御業と調和し、すべての真の教育はその御統治への従順へと導く。科学は私たちの目に新たな驚異を開き、高く飛翔して新たな深みを探求する。しかし、その研究から神の啓示に矛盾するものを何一つもたらさない。無知は、科学に訴えることで神についての誤った見解を支えようとする

ことがあるが、自然という書物と書かれた言葉は互いに光を投げかけ合う。このようにして、私たちは創造主を崇め、その御言葉に理性的な信頼を置くように導かれる。」『族長と預言者』113-115.